

事例報告 H27-6

団体名： 特定非営利活動法人 とよなか市民環境会議アジェンダ21

プログラム名： 世界・自然・豊中を学ぼう！ ぴったんこ隊		
(1) プログラムの目標	<p>小学1～4年生を対象にした、全5～7回の連続講座。年2期（各期20人）。学びをサポートする大学生、環境教育プログラム作りに精通したスタッフで運営し、子どもたちと学生（大阪大学環境サークル）の両者を複層的、相互的に育成することを目的としている。</p> <p>子どもたちは「食べ物」「水」「森林」などの各テーマを実践やワークショップ中で体験し、自分とのつながりを感じ、多様な子どもたちとみんなで考える力を伸ばす。</p> <p>一方、大学生は、各テーマを子どもたちに「伝える力」「共に考える場を作る力」「見守り、育てる力」を実践の中で得ていく。また、大学生には子どもを教える対象としてではなく、子どもからも学ぶという姿勢を伝え、知識や経験が十分でなくても、相互に学び合えることを体感してもらう。</p>	
(2) プログラムの概要	<p>6回の講座のうち、森林とかかわりがある「動物」に焦点を当てた講座を2時間、「森林」をフィールドにした講座を1日（7時間）、森林からの恩恵の理解を深める「水」をテーマにした講座を4時間行った。</p> <p>1日目はセンター内で</p> <p>2日目は、豊中市立青少年自然の家（森林）に出かけ、室内で森林の現状を知る人形劇を見た後、森林の中で葉っぱを探すゲームや森林の探検を行った。その後、森林整備として、下草や木の間伐を行った。</p> <p>3日目は、別日に世界の水の問題を知り、その後の講座として、私たちの生活水と水のろ過実験を行った。森林が水をろ過してくれることを、実験を通して、伝えた。</p>	
(3) プログラムの展開		
時間数	プログラムタイトル	
	活動内容	指導・支援の方法、ポイント等（教材等）
2 (1日目)	ドイツのゲームで動物博士	<p>遊びながら、生物を見る様々な視点があることに気づいてもらう。動物の特徴を正しく覚えることにこだわるのではなく、特徴を考えながら、動物に興味を持つことを大切にする。わからないことを友達と一緒に想像し、話合う。</p>
	<p>「動物」の特徴を当てるゲームを行い。豊中にある動物クイズをした後、ゲーム用に個人で豊中の動物の絵と特徴を書き、それを使って、さらにゲームをした。</p>	
0.5 (2日目)	森のお話（人形劇）	<p>森林から受けている恩恵、世界の森林と日本の森林の違い、人工林と天然林の違い、木材の輸入の自由化で放置された日本の山について、キャラクターを使って、人形劇で伝える。劇の後、子どもたちにどんな話だったか、どう思ったかを質問して、内容をより深める。</p>
	<p>キャラクター（タヌキとレッサーパンダ）を使った日本と世界の森の現状を知る人形劇</p> <p>※大学生企画・運営</p>	
1.5 (2日目)	葉っぱ探検隊、生き物探し	<p>お題と同じ葉っぱを探すことで、よく見る力や探す楽しさを感じた後、前回の動物を思い出しながら、どんな特徴の動物が、どんなフィールドサインを残したか探す。</p> <p>季節的に前回の講座の動物（哺乳類や爬虫類）に出会うことは難しいが、前回考えた動物とその動物がすんでいる森とがつながるような声掛けをする。</p>
	<p>お題の葉っぱを探すゲーム、生き物のフィールドサインを探す</p> <p>※豊中市立青少年自然の家の職員担当</p>	
2 (2日目)	きこり体験（森の整備体験）	<p>この作業が朝に聞いたタヌキの話とつながっていて、森を守るために行っていることを、作業の前後に伝え、作業の意味を子どもたちの中に残すようにする。</p>
	<p>のこぎりを使って、下草や細い木などを切っていく</p> <p>※豊中市立青少年自然の家の職員担当</p>	
1 (3日目)	お水のお話（ろ過実験）	<p>水をきれいにする話をした後、ろ過実験を行う。このろ過が自然で行われているところが、森であることを子どもたちに気づいてもらう。</p>
	<p>竹炭を使った水のろ過実験とお話</p> <p>※大学生企画・運営</p>	



(4) プログラムでの連携内容 (①学校、②地域)

①参加者を集めるための広報において、対象者への配布をお願いしている。
内容においては、連携ではなく、あえて学校では教えていない視点や学校では取り上げにく方法をプログラムに入れることで、学校教育と差別化し、学校とは違った地域での学びの場の提供という位置づけにしている。

②大阪大学環境サークルGES C (ゲックス) 環境教育班と連携し、講座の企画、毎回の運営を行っている。
フィールドにおいても、豊中市立青少年自然の家に協力していただき、こちらの目的と作業やゲームのすり合わせを行った。各期、数回は環境とは直接関係がないように見える専門家 (例えば、ドイツのゲームの日はおもちゃコンサルタントの方) に協力いただき、なかなか取り上げられない手法や切り口で、オリジナルのプログラムを作って、実施している。

(5) 活動の分析 (学習指導要領との関連または森林環境教育の視点) 上位3項目

4 現状・課題	人形劇やきこり体験 (森の整備体験) を通して、何が課題で自分たちは何ができるのか、体験を通して、学ぶ。 大学生には、今の日本と世界の森林の現状について、善悪ではなく、どう分かりやすく子どもたちに伝えるかを工夫する中で、森林の課題について、自らで深めてもらう。	
3 多面的	私たちが様々な形で、森林から恩恵を受けていることを、人形劇や水のろ過実験を通して、わかりやすく、記憶に残る体験を通して、学ぶ。	
2 自然的	室内で子どもたちの興味をひく「動物」を題材にした遊びと、実際に森の中で葉っぱや生き物を探することで、五感を使って楽しみながら自然を感じると共に、身近で興味があると感じられるものと森という子どもたちには少し離れているように感じる場所とを結びつける。	
教科	項目	学習内容
		特に関連付けて、教えていない。また、異年齢を対象にしているので、習ったかどうかの配慮はするが、関連付ける必要性を感じていない。

(6) 活動の分析 (資質・能力の視点)

6 つながり	連続講座で皆勤率が高いぴったんこ隊では、「森林」のことについても、森林をテーマとする日に学びを限定するのではなく、複数回、様々な側面で学ぶことで、自分の生活と森林が繋がっている (ぴったんこしている) ことに気づくような、声掛けを心がけた。	
5 協力	約20人を4班に分けて、グループを作るとき、異年齢、他地域の子もたちで構成し、グループワークも頻繁に行った。森林のゲームや作業では、お互い助け合ったり、年下の子や苦手な子を助ける姿も見られた。また、意見が違ふことは悪いことではないが、その中でどのようにみんなで話し合い合意をしたり、自分の気持ちを持っていくかは大学生がきめ細かな対応や声掛けを行った。環境問題において、ステークホルダーの対立はよくある事なので、子どものころから、対立を回避するのではなく、対立にどう向き合い、合意を得ていくかを体験することは大切である。リーダー内でもそれについて話をし、長期的な視点で子どもたちを育むことについて、考えながら、プログラムを進行している。	
3 多面的	プログラムの中では、私たちが考える善悪の価値について、子どもたちにできるだけ、発言しないようにしている。事実を伝え、それに対してどう考え、どう思うかは子どもたちにゆだねている。また、一方向しか見えていないような発言があれば、リーダーたちが違う見方を促したり、自分たちで考え、自分たちで決める体験を多く入れている。	

(7) 実施後、参加者の変化

- ・ 日常で使う紙や水が森と繋がっているということを認識し、無駄づかいしている友達に、注意するような場面が見受けられた。
- ・ 異年齢や地域が違う子たちと話し合いをする中で、自分の意見が言えるようになったり、ぶつかり合うような場面でも、リーダーが誘導しなくても、見守るだけで、自分たちで考えて答えを出すことができるようになってきた。
- ・ 大学生は、最初、ぴったんこ隊のお手伝いという立場だったが、段々と運営側の意識が芽生え、プログラムを運営、作る中で、失敗し、悩みながら、子どもとの接し方や伝え方の手法を学んでいる。

毎回のプログラムを終えた後の振り返りの発言が、短期的な視点から、次のプログラムにどうつなげるか、子どもの気づきを促すためにどうするかという長期的な視点に変化した。

子どもと大学生が共に学ぶ

ぴったんこ隊



全5~7回の子ども対象のESD連続講座。各回「食べ物」「水」「森林」などのテーマを取り上げ、室内やフィールドでの活動。それぞれのつながりが回を重ねる毎に、より理解できるプログラム。「ぴったんこ」を体験の意味で使用。

環境交流センター(室内)

わっぱるの森(フィールド)



ゲーム、クイズ、ワークショップ、実験などを通して、グループや個人で学びを深めます。



ゲーム、人形劇、自然観察、森林管理作業などを通して、みんなと協力しながら学びを深めます。

相互的な学び

参加者として楽しみ学ぶ

ぴったんこ隊員
(子どもたち)



大学生に寄り添われることで気づく、学ぶ、考える

リーダーとして子どもに寄り添う
プログラムを企画、運営する

学生たち
(大阪大学環境サークル
G E C S 環境教育班)



子ども達に伝えることで学ぶ、子どもたちの発想や発言に学ぶ

大切にしていること

- テーマに対して、善悪の価値判断を伝えないこと
- 学び合いの精神(子どもからも学ぶ)
- 保護者にも意義を伝えること(家の学びにつなげる)
- それぞれの子ども、学生に寄り添うこと